

小池辰雄記念図書室だより

2018.2.16 (金) NO. 41 千葉市若葉区都賀3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

第二回小池辰雄誕生日記念会

2018年2月7日(水)に第二回小池辰雄誕生日記念会を開催いたしました。4名のかたのお証と、3名のかたの講話、バザールヴィタのサンドイッチと飲み物を中心とした愛餐、その間の小池信雄さんと牧子さんの「父の足跡から見えてきたこと」と題するお話、その後のお交わりと続き、とても素晴らしい会となりました。小池信雄さんが帰りがけに「小池辰雄も喜んでいると思う。」と言っておられました。楽しい宴でした。



✿ご挨拶✿

小池辰雄先生のお誕生をお祝いする会がこの記念図書室で開催できることをまことに幸いにぞんじます。お元気な頃は毎年、武蔵野幕屋の集会室で催されて、先生を取り巻く信仰熱心なご婦人たちの心づくしがテーブルに溢れたことを思い出します。歌あり証あり近況報告あり。随分賑やかで楽しい集いでした。

信仰は自分一代で仕上がるものではありません。宗教改革者たちの土台の上に内村鑑三先生が建て、藤井武、塚本虎二両先生が建て増しして、小池辰雄先生がそれを改築した所に私が北側の部屋に住み込み、同居人が溢れかえって、今や建物全体に及んで迷惑をかけている。

私たちは内村鑑三先生から数えて三代目、四代目です。先輩たちのお蔭でここまできました。ただただ感謝です。今日はその感謝デイのつもりでみなさまをお招きしました。 水谷幹夫



「お爺ちゃんに教えられたこと」小池朝子さん

小池辰雄を読む会

●余市「無の神学」

2018年4月8日(日) 13:30~15:00
余市郡余市町豊丘町370-9 恵泉祈りの家
*会費:無料(自由献金)
*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌「靈界の星々」

2018年3月3日(土) 13:30~15:00
2018年4月8日(土) 13:30~15:00
札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家
*会費:無料(自由献金)
*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都賀「聖書の人ルター」

2018年3月17日(土) 10:00~12:00
2018年4月28日(土) 10:00~12:00
千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プロザ 5F
***自由献金**

*連絡先:043-235-3815(石丸)
***準備のため出席のご連絡をお願いします。**
*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

『ハレルヤ』創刊号

1969（昭和 44）年の夏期特別福音集会は、1954（昭和 29）年スタートから数えて第 16 回目。前年に續いて、長野県鹿沢温泉・紅葉館が会場だ。100 人の教友が山を登ってきた。8 月 22～25 日の鹿沢夏期集会 4 日間の記録が残る月報『ハレルヤ』を紹介したい。1969 年 10 月の創刊号だ。一面の「創刊にあたって」に、辰雄はこう書いた。

「昨年の鹿沢集会のあとで、東京、京都、小諸を中心とする三方面の教友たちが、使徒的信仰という共同の志のゆえに、キリスト召団を結成した。それぞのグループにそれぞれの月報があつて然るべきだと思い、京都の『天旅』、小諸の『石垣会だより』と同様、むさしの福音集会の『ハレルヤ』を出すことにした」と。

〈ハレルヤ〉はヘブライ語。「主は讃むべきかな！」と讃美する叫び、栄光を主に帰する讃美の声である、と辰雄は言う。

第 16 回鹿沢特別福音集会報告「大祭司を讃う（水谷渥子記）」が強く印象に残る。

「武藏野ではこの夏の集会に備えて、一週間の連続祈祷会が午後 7 時から持たれた」とあり驚く。4 日間の講筵主題は「ヘブル書の根本精神」。キリストという大祭司がどん底の十字架の贖罪を担われた。われわれキリスト者、どのようにその祭司精神に生きればよいのか。1 日目講筵「聖子の苦難と栄光」ヘブル 1、2 章、2 日目講筵「安息」同 3、4 章、夜の祈祷会「靈魂の錨」同 5、6 章…と前の 2 日間の筆は進んでいく。以下、本文を転載。

「先生は人生のどのような荒海に遭うともキリストの錨を乗せて進むとき難破はない、と雄叫びして語り終え、力強い祈祷会に入った。聖靈のバプテスマを受けて回心する者続出！ まことにハレルヤの祈り会であった。

さてその夜のことである。先生も教友たちと温泉につかっておられると、突如電報が来た。先生

のご子息が自動車事故に遭われて重態を告げるものであった。」と、急な展開を、冷静に受け止めて記している。

辰雄と妻・順子はその夜、急遽東京に帰ることになったのだ。

次男・照雄の運転する車が環状 7 号線と世田谷通りの交差する場所で正面衝突。そこへ大型トラックが突っ込んだ。駆けつけた救急隊員の目には運転者死亡と写ったらしい。けれども幸い、照雄は助かっていた。

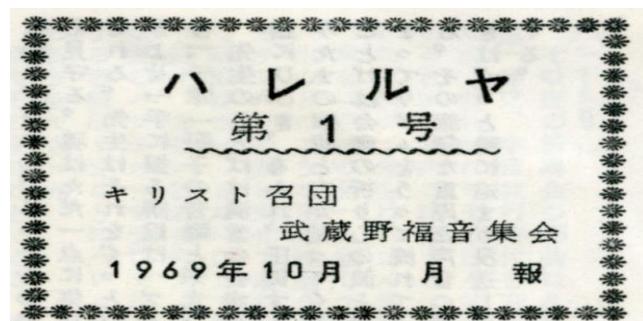
辰雄は同じ『ハレルヤ』の最終ページに、「召団、ハレルヤ！」を叫ぶ。

「私が家族の不慮の事故のため突如下山したので、白熱の途上にあったヘブル書講筵は中断のやむなきに至ったが（秋に入つて続講中）、私市、奥田、市川、杉本、久住、野中、長坂の諸兄が相前後して、あるいは司会、あるいは講筵をもつて大集会を、水谷姉の報告の如く、終わりまで全うしてくれて、ハレルヤであった。

このように聖靈と聖言にあって戦う戦士たちがすでに鍛えあげられつつある実相を見て、キリスト召団の将来をたのもしく思っている。私自身はこれからが本当の戦いと思っているが、使徒的信仰の証者たるべき志をかためている多くの兄弟姉妹を得て、本当に感謝である。

そういう不思議な現在と未来の織りなされた大集会で、感激と讃美を聖名に歸し奉る。」と。

月報『ハレルヤ』は、この後、1977（昭和 52）年 9 月（第 44 号）まで、東京キリスト召団の機関紙として発行された。



ハレルヤ 第 1 号